2学部で学部長表彰

商、ネットワーク情報の２学部では08年度に、学内外において勉学・スポーツ・課外活動を通じて顕著な成績を収めた学生に対し、学部長表彰が行われた。

表彰者・チーム名、所属団体、表彰内容などは次の通り（カッコ内は学年、敬称略）

商学部

▽公認会計士試験合格＝佐藤甲斐（4）、酒井真也（4）、阿部裕泰（3）、岩瀬善幸（3）、橋本裕（3）、尾花透（3）▽専大ベンチャービジネスコンテスト・プレゼンテーション鳳賞＝柿内快士（1・代表）、上仲孝明（3）、小田竜生（3）、須田徹也（3）、▽箱根駅伝出場＝木下卓己（4）、森脇啓太（4）▽神奈川産学チャレンジプログラム最優秀賞＝山本達也（4）、倉科友歌（4）、竹澤美希（4）、小松まなみ（4）▽全日本学生選抜卓球選手権優勝＝高瑜瑶（2）

▲　川村晃正学部長を囲んで（商学部）

ネットワーク情報学部

▽専大ベンチャービジネスコンテスト・㈱ネクスト特別賞（小林隆プロジェクト代表）＝高山久美子（3）、織田智菜（3）、安西優（3）▽ファンドマネージャー専大グランプリ・投資パフォーマンス個人部門優勝＝今井秀（4）▽同団体部門優勝＝田中将司（4）、鷲山健人（4）、滝佳之（4）、今井秀、三品祐樹（4）▽第11回まちかどのフィランソロピスト賞青少年部門賞（㈳日本フィランソロピー協会主催）＝戸津亜里紗（4）

▲　中村友保学部長から賞状を受け取る高山さん（ネットワーク情報学部）

「自殺者増加の原因」「災害地のバス復興」…

後輩学生に力作披露

社会学専攻4年次生の優秀卒業論文

文学部人文学科社会学専攻4年次生による優秀卒業論文発表が1月28日、生田キャンパスで、08年度専修大学社会学会（広田康生会長＝文学部教授）の席上行われ、後輩学生ら200人が傾聴した。

優秀卒業論文は、同専攻10ゼミナールの指導教員が選んだ代表論文を、さらに大学院生が審査し、優秀作3本が決まる。今年度は次の3人。

▽小森田龍生さん（嶋根克己ゼミ）「経済的要因による自殺増加の背景―経済格差・雇用問題・文化の視点から―」

▽田村修さん（大矢根淳ゼミ）「『結い』による新たな公共交通機関の創出―新潟県中越地震被災地・山古志における『クローバーバス』プロジェクトにおける聞き取り調査より」

▽綿引勇太さん（宇都榮子ゼミ）「児童養護施設入所児童の学習をどう支援するか―学習支援の重要性と学生ボランティアの役割と有効性―」

3人の発表に対し、大学院生の斉頴賢さん（博士後期課程）、田仲聡さん（同）、林美菜さん（修士課程）が論評を加えた。後輩学生との質疑応答も活発だった。

発表を終え田村さんは、「被災地・山古志で復興した会員制バスの会員加入世帯率の高さ（96%以上）と利用者以外も加入している点に注目した。農作業において存在した『結い』の精神が、バス復興の力になった」と論文の着目点を語った。

綿引さんは「児童養護施設実習では、子供たちとコミュニケーションをとるので精いっぱいだったが、最後は打ち解けられた。自分の進路を決める意味でも大変貴重な体験だった」と振り返った。

広田会長は3作品を「フィールドでの調査研究から理論的な考察を志向するものまで努力が詰まった力作」と評し、「社会学会は本大会で20年。優秀卒論発表は、研究の面白さを伝えるという意味で大変有意義な役割を果たしてきた。2010年度新設の『人間科学部社会学科』に向けて新たな学問的伝統形成へとつなげたい」と語った。

▲　会場の質問に答える田村さんと右へ綿引さん、小森田さん

環境地理学専攻の2学生

地理学卒論の全国大会で発表

文学部環境地理学専攻4年次の富田国良さんと高橋千里さんが、3月17日、東京学芸大学で開催された全国地理学専攻学生卒業論文発表大会で学びの集大成を発表。2人とも丁寧に作成したパワーポイント・スライドを使用し、落ち着いた様子で「専大生のチカラ」を発揮した。

日本地理教育学会主催で20年以上続いているこの発表会には、卒論の内容と最終発表会（口頭試問）の状況などから総合的に判断し、人文地理学と自然地理学から各1人ずつ優秀発表者が派遣されている。

富田さんは、地形学を専門とする苅谷愛彦准教授の指導のもとで研究した。「先生からお借りした書籍で蝶ヶ岳のことを知り、解き明かされていない山について調べようと決めました。何度も山に入り、調査を進めるなかでフィールドワークも含めて自ら計画、実行、結果を出すことの難しさと同時に達成感を得ることができました。先生との出会いが、もともと好きだった『山』について深く調べたいという気持ちにさせてくれ、研究に対しては高い評価をいただき、大きな自信となりました」と話してくれた。

富田国良さん「飛騨山脈南部・蝶ヶ岳東面の巨大崩壊」

高橋千里さん「首都圏における病児保育の現状と課題」

富田国良さんは「飛騨山脈南部・蝶ヶ岳東面の巨大崩壊」を報告。1983年発表の論文で、10万年前には氷河があったとされる蝶ヶ岳東面の地質を調べ、氷河特有の堆積物がなかったことから、巨大な地すべりがあったと仮説をたてた書籍で蝶ヶ岳のことを知り、解き明かされていない山について調べようと決めました。何度も山に入り、調査を進めるなかでフィールドワークも含めて自ら計画、実行、結果を出すことの難しさと同時に達成感を得ることができました。先生との出会いが、もともと好きだった『山』について深く調べたいという気持ちにさせてくれ、研究に対しては高い評価をいただき、大きな自信となりました」と話してくれた。

「地域の人口問題」を専門とする江崎雄治准教授の指導で「首都圏における病児保育の現状と課題」を発表した高橋さんは「仕事をもつ母親の子育て支援として、自分の将来にも関係することを調べたいと思い、テーマを設定しました。病児保育の施設を訪問し、インタビュー調査していく中で、皆さんが一生懸命に取り組んでいる姿に感動し、一段と力を入れて取り組むことができました。一般企業に就職しますが、人事部などに配属された時、子育てしやすい環境整備などに、得た知識を生かしたいと思っています」と話している。

▲　発表する富田さん

▲　発表を終え笑顔の高橋さん（左）、苅谷准教授と富田さん

「若手の会」

情報システムと社会環境研究会

3月18、19の両日、神田キャンパスで開かれた第107回情報システムと社会環境研究発表会の特集「若手の会」で、堀越永幸さん（ネット情報3）が「学習意欲を向上することを狙いとする携帯型電子ノートとSNSを融合したeラーニングシステムの提案」を発表した＝写真。小菅拓真さん（同）、戸口裕人さん（同）、小室匡史さん（同4）、柳澤剣さん（同）も研究成果を報告した。

ネットワーク情報学部生らが出展

「情報技術」を社会の課題解決に

川崎市内の企業、大学などがもつ環境技術の高さを世界に発信する「川崎国際環境技術展」が17団体、199ブースが出展して2月17、18の両日、中原区のとどろきアリーナで開かれた。本学もネットワーク情報学部の学生を中心に研究成果を出展した＝写真。

綿貫理明プロジェクトの2007年度「地球温暖化対策プロジェクト」からは温暖化に関する意識調査、3Dグラフィックスによる地球温暖化物語などを展示。2008年度「サマソウ　ニッポン」（田中稔・綿貫プロジェクト）の拡張現実感を用いた環境絵本は、小学生に大人気だった。綿貫研究室の4年次生の研究からはGoogle Maps API を利用した集合知による温暖化対策、センサネットワークによる環境情報の視覚化などを展示し、阿部孝夫川崎市長、皆川敏明多摩区長をはじめ多くの来場者に解説した。産学連携や受託研究、インターンシップで協力をいただいているセントラルシステムズの大西寿郎社長、「IT匠の会」の楠裕行氏も会場を訪れ、学生たちを激励してくれた。

また、国際協力サークル「S・I・A」が取り組んでいるエコキャップとフェアトレード活動についても紹介され、大学全体としての環境への取り組みを強力にアピールする機会となった。綿貫教授は、「学んだ知識と技術を生かして、地球温暖化という全世界的な課題解決に取り組んだ学生たちは、本学のビジョン『社会知性の開発』を体感できた」と話した。

川崎国際環境技術展2009

セクシュアル・ハラスメント防止委員会から

相互理解のための表現力を磨く

このコラムを書くにあたって書き出しに悩んでいた時に飛び込んできたのが、アメリカアカデミー賞で、映画『おくりびと』が日本作品として初の外国語映画賞を受賞したというニュースでした。

納棺師という仕事に就いた男性が、その仕事を通じて人間の生や死と向き合う様を描いた内容だそうです。日本古来の文化と日本人の感性が文化や感性の異なる海外で高い評価を得て、経済不況や民族間紛争などで乾いた現代人の心に、日本人の細やかな心遣いが潤いと安らぎを与えたように思います。

しかし、そこでハタと考えてしまいました。そんなすばらしい国民性を持った日本で、人の心を深く傷つけるハラスメントという悲しい事件がなぜ起きてしまうのでしょうか？　「他人を思いやりましょう」「その人の気持ちになって考えましょう」――私たちは、幼い時分から言われ続けてきたはずです。それなのになぜ？

日本人の美徳であるはずの他者への慈しみやいたわりの気持ちが高じて、「こんなことを言ったら相手に失礼では？」とか「相手を傷つけてしまうのでは？」という感性が自分を適切に表現するための妨げになっていることがあるのかもしれません。しかし今回、日本映画が海外で認められてアカデミー賞を受賞したことで、磨かれた表現力は、お互いの理解と信頼関係を築く大きな力となり得るのだと強く感じました。

過度に自分を抑え込むのではなく、かつ、相手の気持ちを尊重しつつ相手に認めてもらえるような、自分らしい表現力・表現方法がきっとあるはずです。私たち一人ひとりが模索しながら表現力・表現方法に磨きをかけていくことがハラスメントのない「健康で快適な社会」を創ることにつながり、その努力がまた、専修大学の目指す「ハラスメントのない健康なキャンパス」づくりにもつながっていくのだと私は思います。

（古瀬　瑞子）